



「民俗資料」の区分けと資料名称: 生産者数と製造数に注目して

宇仁義和 UNI Yoshikazu
東京農業大学生物産業学部

要約 民具に加え量産品や工業製品を含む広い意味での「民俗資料」の資料名称について、現状の名付けの方法を概観整理し、資料の生産者数と製造数に注目して区分けしたうえで、適切な名付けの方法を考察する。

「民俗資料」の博物館での名称は、民具については公的な調査や学会が与えた学術名称が資料名となってきた。学芸員は、農林漁業の道具や生活用品、アイヌ民族資料や沖縄の民具について、手引きとなる出版物を参照して資料に名前を与えてきた。ただし、これらの参照文献は他分野の学芸員や一般利用者には必ずしも明らかではない。

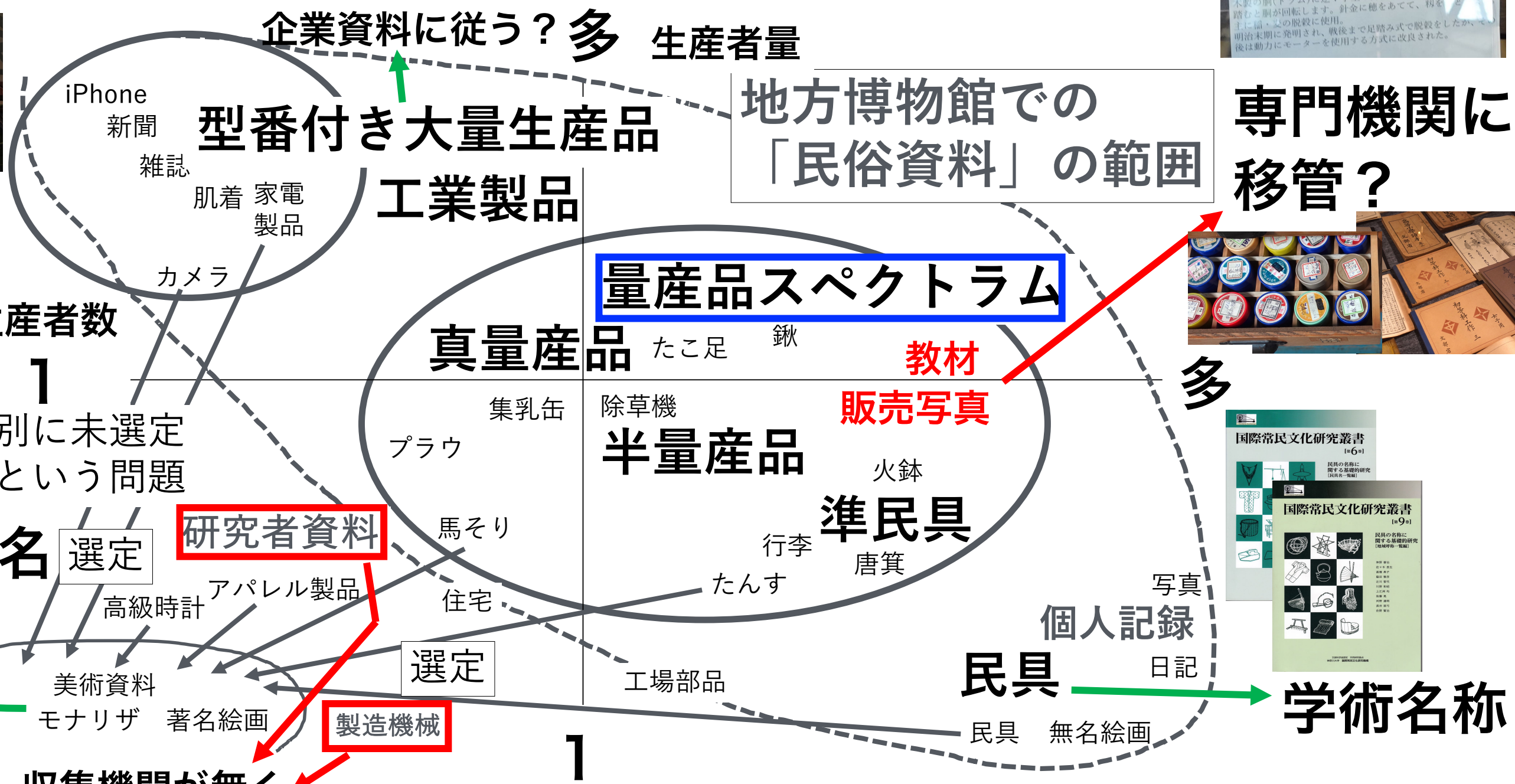
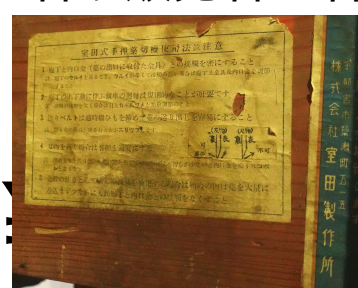
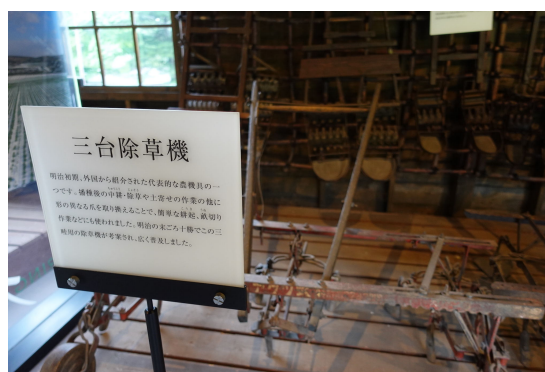
生産者数と製造数に注目すると、「民俗資料」は、美術作品と同様に手作りの一点物を基本とする民具、家電製品やカメラなどの型番付きの工業製品、その中間の家内工業的に製造されてきた量産品の3つに大別できる。資料名は、民具では学術名称が標準名となり、工業製品は型番がIDとして機能する。問題は製品自体が使われなくなり、製造者の大半が廃業している量産品である。標準的文献やネット情報が無く、量産の度合いの違いも大きい。現在の博物館では、量産品の名称が大きな課題と考える。

案1: 学名の二名法にならう

集合名が先、型式は後に

三台除草機 → 除草機 (三台除草機)

足踏み式脱穀機 → 脱穀機 (足踏み式)

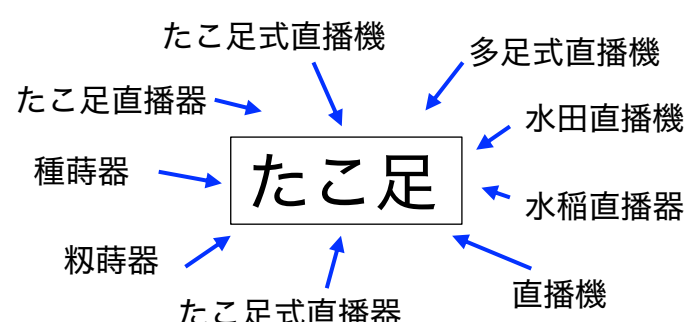


案2: 集合名のみにする

型式は備考欄 / 集合名の項目付与

唐箕は形状が異なっても唐箕

〇〇式唐箕の名称は見ない



案3: 公定名称を用いる

指導書や博覧会資料、登録板から
使用可能な名称を探し出す



案4: 特定館の名称に従う

権威やネット公開など
普及が見込まれる場合
案3の実践館が該当



世界一の生糸輸出を支えた明治期の製糸業の歴史に関する資料をご紹介します。
ここでは、同谷製糸博物館（長野県）と一般財団法人大日本製糸会（東京都）の協力を得て、かつて製糸・製糸に使用された道具類や製糸の会館資料などを掲載しています。

同谷製糸博物館所蔵の資料（長野県）
明治時代初期、同谷の人々はイタリアやフランスから導入された洋式製糸機械に創意工夫、改良を加えた脚立式製糸機を開発しました。その技術は全国に普及し、この地で生産された生糸の多くは輸出され、一次製糸地として発展しました。
同谷製糸博物館には、明治5年創業当時の官製製糸工場「使用機」一帯に保存されているフランス式製糸機や、同谷で開発された脚立式製糸機など、日本を世界一の生糸産国にした製糸機械をはじめ、かつて日本で製糸・製糸に使用された多くの道具類が所蔵されています。

普及型式種蒔器製造別図 (ふきゅうだんしきたねまゆしゅうかんべつぎ) (大正時代)
1 既有用種蒔器製造別図。種は横は重く、種のは横は軽いので、その重さと比較して種蒔器別を行った。大正5年、松本市の大日本一代交配種蒔器及同 (片倉) で考案し、使用された。

産種り器 (ざぐりき) (万延年間に上州地方から信州へ移入)
4ヶの歯車を組み合わせ、把手を回すことにより種蒔 (くりわく) が、5回転し、種蒔作業の効率化が図られた。

